
私の相棒は・・・龍？

アルトアイゼン・リーゼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の相棒は・・・龍？

【Nコード】

N3535BA

【作者名】

アルトアイゼン・リーゼ

【あらすじ】

私はサムス・アラン、フリーのバウンティ・ハンターだ

私は政府の依頼を受け廃棄コロニーに存在するメトロイドらしき物の駆除を行っていた。そんな私の前にある男が現れた、彼はモドキ達は一瞬にして凍らせ次の瞬間には、はじけ飛んだ

『デイルス・ザウング』彼はそう名乗った。私は彼の腕と洞察力、彼の正体を知るために行動をする事にした

彼との出会い

広大なる大宇宙・・・

その暗黒の宇宙にポツリと浮かぶ一つの人工物・・・

コロニーだ、そこで明るいう光が巻き起こり爆発が起きる

そこには古代の甲冑を模したような赤とオレンジ色の装甲

右腕部には砲塔のようなものが装備されている

彼女は言わずと知れたバウンティ・ハンター

サムス・アラン

私はサムス・アラン、フリーのバウンティ・ハンターだ

私は政府の依頼を受け廃棄コロニーに存在するメトロイドらしき物の駆除を行っていた

・・・小さく1つしか無い核で、容易に判別できるメトロイドモドキだ

スペースパイレーツが独自に繁殖・改造を試みた結果、失敗したメトロイドの劣化個体

それがメトロイドモドキ、これなら政府でも簡単に処理できる
私はスターシップに戻ろうとした時、設置したセンサーに反応があった

凄まじいまでの数のメトロイドモドキがこちらに向かっている

ビームエネルギーをアームキャノン内部で凝縮させる

モドキ達が向かってくる方向にアームキャノンを向けた

そして大量のモドキが飛び出してきた

発射しようとしたその時、モドキ達は一瞬にして凍りつき

次の瞬間には、はじけ飛んだ・・・

信じられない・・・幾らモドキといってもこれほどの数を・・・

コツツ・・・コツツ・・・規則正しい足音が聞こえる・・・人？

いやそれはないはずだ、ここは空気は有るが人間が住める環境では

ない

私は再びアームキャノンに向けた

現れたのは長い金の長髪に青い目と茶色の瞳

私よりやや身長は高い、見たところ・・・10代後半といった所の青年だ

「・・・今ので93か・・・」

そんなに討ち取ったのか？私は彼の方に近づいた
彼も私に気づいたのか私の方を見る

「・・・何者だ」

威嚇の意味も込め強く訪ねる

「私の名前は・・・ディラス・ザウंगाと言います」

ディラス・・・ザウंगा・・・

「失礼ですがあなたのお名前を聞いても宜しいでしょうか？」

「私はサムス・アラン、フリーのバウンティ・ハンターだ」

淡々とそう答えた

「いいお名前ですね」

男は私に対して笑顔で言った

・・・少しドキッとした・・・そうだ聞いておかなくては・・・

「何故君のような未成年が此所に？」

その時彼の顔が凍った

「あの・・・私は一応・・・26なんですけど・・・」

な、何？私より年上だと！？

「そ、それは失礼・・・でなぜこんな所に？」

「それがよく解らないのですよ、目が覚めたら此所に居たので・・・
そして散策をしていたのですがあれに出くわしたんです

見た目からして水分が多いと解りましたので凍らせ破壊するのが正しいと

思ったので」

始めて見たメトロイドの攻略法を見抜いたのか・・・！？

その後私は彼と共にコロニーに残ったモドキを一掃し彼と共にコロニーを後にした

そして私は彼の正体を掴むため私と仕事を共にする事とした

余談だが一人乗りだったスターシップを二人乗りのスターシップに
買い換えた

私とサムス

どうも皆様おはよう御座います、こんにちわ、こんばんわ
ディラス・ザウンガです

私は今料理中です、それにしてもこの世界のキッチンには進化してま
すね

ですが私はハイテクな機器は使わずに調理中です

料理は手をかけた方が美味しいですからね

そして料理をテーブルに運びサムスを呼びに行きますか

私は呼びに行こうとした時に長い金髪を靡かせてサムスがやって来た

「ずいぶんとお疲れでしたね？」

「ああ・・・少し疲れた・・・」

「お食事を用意しておきましたよ？」

「ありがとうございます、ディラス」

「いいえ、お安い御用ですよ」

私とサムスが出会って既に一月が経ちました

最初は警戒されましたが今ではいいパートナー関係です

まあ私とサムスが一緒に仕事はしますが主にサムスが行います

私の方にはあまり動きませんね・・・最近スターシップ内で留守番
ぐらいしかして無い気が・・・

はあ・・・少し凹みますね・・・私はおもわず溜め息を吐いた

「どうしたんだ？ディラス？」

サムスが心配してくれているのか話しかけてきてくれた

「いえ・・・私の方は何も賞金首を捕らえたり、依頼を達成してい

ないと思ひまして・・・」

私はかなり肩を落とした

「だ、大丈夫だ安心しろ！」

例え何もなくてディラスは私のパートナーである事に変わりないのだから！」

サムスは私を励まそうとしています

「有難う・・・サムス・・・」

私は今できる笑顔でサムスに言いました

サムスは若干頬を染めて料理に向き合いました
・・・皆は元気ですかね？

それと報告です私は謎の若返りをしてしまったのです
私は30歳だったのにアレスによれば細胞が20代に若返っている
と

言われて驚きました、だからサムスに会った時は咄嗟に26と言っ
たのです

でも何故この世界に・・・
ズズッ・・・ゴック・・・コップに入った水を飲み干した

此所での生活が退屈と言いつくではありません
ですが今まで生きてきた世界が恋しくなってきました・・・
ビー！！ビー！！

突如警報音が鳴り響きました

サムスと私はブリッジにあがって状況の解析に当たります
サムスが操縦席、私がリーダー、センサー、通信、その他色々
サムスはいつの間にかパワードスーツを着ていた

「！前方100にて高エネルギー反応！！かなりのエネルギーです！」

「急速に進路を変更する！出力全開！非常用スラスタ稼働！」

「了解！出力全開！非常用スラスタ稼働！」

サムスは左手で球体状の操縦球を操作し出力を全開する

私は非常用のスラスタを稼働させる

スターシップはそのスラスタの振動で大きく揺れ始める

が大型の戦艦にも負けないはずの推進力があるにもかかわらず引き寄せられていく

「まずい！引き寄せられてる！距離！90！80！70！60！」

「くっ！」

スターシップはそのままエネルギーの渦に引きずり込まれた

「うわあああああ！！！！！」

私達は強い衝撃で意識を失った・・・

スターシップは渦に飲み込まれて消えていった・・・

サムスサイド

・・・ううん・・・

私はどうなったのだ・・・？

私が目を覚ますと私は横になっていた

「気が着きましたか？」

ディラスが横に座っていた、私は上半身を起こした

「ディラス・・・私達はどうなった・・・？」

「・・・サムス、落ち着いて聞いてください、ここは私が居た世界の地球です」

「何!？」

サムスは驚愕する

サムスには私の事を全て話しておきました

「これからどうするんだ!？」

「落ち着いてくださいサムス」

「・・・すまない・・・取り乱して・・・だがこれからどうするんだ？」

「しかもやつかいな事にこの世界は私が居た世界とは少しズレた世界の様なのです」

「ズレた世界？」

「ええ、この世界では私に関係するものはありませんでしたそれに・・・これです」

ディラスは赤とオレンジ色の指輪を取り出した

「これは？」

「君のパワードスーツですよ

この世界に來た影響で私の物と同じGF化したようです」

「GF?確かISとは違う奴だな」

「ええ、その通りです、私が開発設計した物です、それより

ここは私の親の家です、この世界は私が産まれなかつた世界の様です既にこの世界での情報操作は行っておきましたので此所を使つても問題ありません暫くは此所で暮らしましょう、両親の財産が残っていますから」

「手早いな・・・」

私とディラスはこの世界で生きていくしかないようだ

アグリユ・・・じゃなくて一夏を助けに行きます

この世界に来て既に半年が経過した

ディラスは家で出来る仕事を見つけた

私も何かできないか模索しているがなかなか上手くいかない

私の世界とこの世界は文化レベルが違いすぎる

出掛ける時にはディラスのサポートがないと危うい・・・

なさない・・・料理は出来るのだがこの世界のは古いためなかなか慣れない・・・

ディラスに頼りっぱなしだ・・・はあ・・・

そして翌日私とディラスはモンド・グロツソの会場に向かった

21の国と地域が参加して行われるIS同士での対戦の世界大会

ディラス曰く戦闘を真似事つと言っていた

そして目的はもう一つ織斑 一夏の救出

必要になれば行つらしい、私は会場に残り一夏の姉という織斑 千冬を監視する事になっている

・・・そして一夏が誘拐された

ディラスは誘拐自体を阻止しようとしたが間に合わなかったらしい

そしてディラスは誘拐犯たちの居場所を突き止めそこで待機している
千冬が来るかどうかで行動するらしい

私は助けに向かうと思っっている、家族より地位や名誉を獲る彼女ではないと思っっている

ディラスの話聞いた限りではな、だが私の予想は簡単に碎け散った
彼女は決勝戦に出ている・・・自分の家族より地位や名誉を選んだのか・・・

私は通信機のスイッチを押した

「ディラス、織斑 千冬は決勝戦に出た自分の家族より地位や名誉を選んだようだ」

『……こちらでも誘拐犯達が言っていますよ……では助けてきます……(ブツツ!)』

デイラスは悲しげな声をあげて通信を切った
私も行くか……席を立ち上がり会場を出た

デイラスサイド

・・・

「ぐわあああ!!!」

「ひぎゃあああ!!!」

ああ……千冬さん……私は貴女に失望しましたよ……

自分の家族より地位や名誉を選ぶとは……

デイラスは剣や『死の吹雪』デス・ブリザードで戦闘不能にしてい

まさに無双、誘拐犯は全滅した

そしてデイラスは一夏に近づく

「大丈夫か？」

私は優しく声を掛けながらロープを切つてあげました

すると一夏は私に抱きつき泣き始めました

私は優しく抱きしめました、そのままその場所を後にしました

そして『地獄の龍騎士』ヘルドラゴンを解除しました

元の世界で私の手元に有った状態でよかった、まあ他にもGFありますけど

そして私はサムスと合流しました

一夏……安心しろ……お前は俺が幸せに導いてみせる……

お前は俺の息子で……家族だ……

ディラスは一夏を少し強く抱きしめた

一夏はそれに安心しているのかすやすやと眠っている

・・・あっ・・・そういえば俺が父親だったら母親は？

家族

・・・うん・・・

目を覚ますとそこには白と緑が綺麗に混じっている天井が見えた・

・

「見た事のない天井だ・・・」

僕はベットに寝ている様でそのまま頭だけを動かすと近くの椅子に座り

会話している艶やかな長い金髪をしている男の人と女の人がいた

・・・誰なんだろう？

すると二人は僕が起きているのに気づいたのか近づいてきた

「起きたか、大丈夫か？」

女の人が話しかけてきた

「は、はい・・・あの・・・此所は・・・？」

「此所は私達の家だ、覚えてないか？気を失った後ここに連れてきたんだ」

気を失った・・・？

その時俺の脳裏に誘拐された時の記憶が鮮明に蘇った

『お前の姉はお前という家族より地位や名誉を選んだようだな』

その時僕は絶望したのだ・・・

「……！……い！……おい！大丈夫かい！？」

男の人の声で僕は思考の海から上がってきた

「は、はい……」

今にも泣きそうだ……僕は……何のために……

「僕は……寂しかったです……」

僕はこれまでの自分のことを話す事にした

千冬姉という最高の姉、その姉のせいで起きた事

幾らテストで良い点を取っても当たり前と言われ、出来ない事が有れば

出来損ない、恥曝しと言われ……千冬姉に言っても

『お前なら出来る』

つとばかり言っ僕との相談にも乗ってくれない……

家にもまったく帰ってこない……帰ってきててもすぐに寝るだけ……

自分に構ってくれない……僕に八つ当たりしてきた事もあった……

なんで……ISなんて……出来たんだろう……何で僕は生まれてしまったんだろう……

何でこんなに苦しまなきゃいけないの……？

自殺だって何度も試みたくても決まっているかの様に失敗する……首の動脈を切っても首吊りしても死ねない……僕は一生苦しみから開放されないと解った

友達に言ってもまともに相談に乗ってくれるのは友人の弾と数馬だけだった・・・

二人が嫌な顔しないで真剣に聞いてくれた事が僕にとって心の救済だった・・・

それら全てを話した

男の人は僕の事を優しく尚且つ甘く暖かく抱きしめてくれた

女の人は僕の事を優しく撫でてくれる・・・

「・・・そんな事辛かったんだろう・・・寂しかったんだろう・・・でも大丈夫だ

これからは私達が護ってやる・・・」

僕は耳を疑った

護ってくれるの・・・？千冬姉みたいに放つたらかしのしないの・・・？

「千冬姉みたいに放つたらかしのしない・・・？」

その時女の人に頭を軽く叩かれた

「馬鹿な事を言つな、こんな幼気な子を放っておく訳ないだろう」

その言葉は僕の荒んだ心の傷を潤していくように染み渡っていく・・・

「私達が君の家族になろう、血は繋がっていなくても本当の家族になろう」

「ああ、どうだ？」

二人は僕に言ってくれた・・・

僕は泣きながら頷いた、嬉し涙が止まらない・・・

暫く僕は泣き続けた、その間も僕は二人優しさに包まれていた・・・
そして僕は二人から離れた

「では改めて自己紹介だ、私の名はディラス・ザウンガです」

「私の名はサムス・アランだ宜しく」

「僕の名前は一夏です！」

新しい家族との光に満ちた生活が始まった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3535ba/>

私の相棒は・・・龍？

2012年1月11日17時55分発行